

第1回登別市総合計画第3期基本計画市民検討委員会 産業躍動部会 議事録

- ◆ 開催日時 平成26年5月22日（木）
18:30 ～ 20:00
- ◆ 開催場所 登別市役所2階 図書閲覧室兼会議室
- ◆ 出席部会員 部会長 高橋 弘康
副部会長 小川 賢
部会員 安達 陽子
白田 明義
近井 一夫
川田 弘教
井上 昭人（市庁内検討委員会 副部会長）
【観光経済部商工労政グループ総括主幹】
伊東 肇（市庁内検討委員会 委員）
【観光経済部商工労政グループ商工労政・新エネルギー主幹】
- ◆ 欠席部会員 部会員 木村 義恭
- ◆ 事務局 沼田 久人 【総務部企画調整グループ総括主幹】
上野 雄司 【総務部企画調整グループ企画主幹】
打田 知之 【総務部企画調整グループ主査】
田中 健太郎【総務部企画調整グループ担当員】
- ◆ 議題 当市の産業に関する部会員の思いについて（第1回）

《事務局》

全体的な仕切りは部会長にお任せします。

市民検討委員会は今まで2回やりましたが、個別の部会は今回が初です。

いきなり体系図の検討に取り掛かるのではなく、部会員の皆さんに、これまでの思いをお話しいただいて、部会員の皆さんがどのように考えているのか、お互いわかったうえで、体系図の検討に入りたいと考えています。

目安としては、皆さんの思いを3回くらいの会議の中で語っていただきたいと考えておりますが、1回、2回で話して体系図に入るようなことはあっても良いと考えています。

会議の進め方については、いろんなご意見が出てくると思うが、険悪な雰囲気になると人が来なくなってしまうと思うので、これまでお話しているように、「他人の意見は否定しない」、「1人で長く話さない」などに留意し、楽しく思いを話しながら進めていただきたいと思います。

本日、庁内の産業躍動部会から2名が出席しております。

前回の部会長・副部会長会議で、お話ししましたが、この会議は、市役所に要望ぶつける場ではありません。市役所からの出席者も思いを語らせていただきますので、よろしくをお願いします。

では、部会長、よろしくお願いします。

《部会長》

早速ですが、産業のフリートークということで、皆さんの思いをお願いします。

《部会員》

先日の会議から色々資料を読んでみて、まずは、皆で人口減に対する考え方をしっかり持たないと産業の活力の話には結びつかないと思います。

たとえば、人口増加の要素がないという結論に行き着いたのであれば、観光客などの流動人口をどう扱うかという施策を考えた方が良く感じています。

《部会長》

次の部会員、お願いします。

《部会員》

ないと言え、ないです。

前回までの話して、行政から政策や施策等の方向が体系図としてできているものに対して、話すことはないと思っています。

《事務局》

体系図は決まったことではありません。付け加えるところや削除するところは、いくらやっていただいても構いません。

これまでの全体会議では、今までのありがちなパターンとは違うという話をさせていただきました。

《部会員》

それならわかりましたけど、文書の添削なら必要ないと思っていました。

これから勉強しようと思います。

《部会長》

次の部会員、お願いします。

《部会員》

人口推移の資料を見ると、稼げる力の減少、人口減についての対処について、企業としても市の施策としても考えることが先決だと感じています。

これから、中小企業地域経済振興基本条例が動き出す中で、新しいものを誘致したり、作っていくことも大事だと思うが、少なくとも今ある企業が生き残っていく、もしくは、発展していくことが一番重要だと感じています。

《部会長》

次は副部会長、お願いします。

《副部会長》

これから、みなさんの思いや資料を見て考えていきたいと思います。

《部会長》

産業や観光面でのまちの魅力と人口減に対する考え方が重要と感じている。

海、山、川など登別が持っている魅力を地域が元気に盛り上げていき、観光客が増え、全体として盛り上っていけるようなまちにしたいと思います。

みんなと一緒に力を合わせて考えていきたいと思います。

《事務局》

先ほど、数名の部会員からも出ていたが、人口問題研究所では6千人程度、減ってくる数字を出してきている。そんなに減らないにしても、3千人から4千人は減るでしょうから、人口問題に対して、どのように対応していくか考える必要があります。

働き場所がないと人は来ないので、企業誘致を考えるが、今ある企業のことでも考えなければならない。今ある企業を元気にしたいと考えても、新しい企業が来た時につぶれてしまうようなことは避けなければなりません。

そこで、魅力ある街づくりをしていかなければなりません。

それは、例えば、お年寄りが安心して最後までいられる施策や、他のまちに住んでいる現役世代で子育てしているような人が、登別に住んでも良いとなるようなまちづくりで、現在、庁内の「ぬくもり部会」や「育み部会」といったところでも話し合われています。

皆さんは、人口を増やすためには、どのようにすればよいと考えているでしょうか。

《部会員》

市民を増やすことも必要だが、観光に来る対象は市民じゃなくても良いと考えています。

《事務局》

基本計画のもととなる基本構想では、定住人口だけではなく、観光で来る人口も踏まえた上でまちづくりを考えることとしています。

例えば、これから、北海道に新幹線が来るので、そのお客さんをこの地域に招く施策は広域で考えています。この第3章をつくっていく中で、考えていかなければならないことの1つです。

《部会員》

産業や企業も大事だが、登別としては、観光がメインで、これこそ登別というような

観光地を目指すのが良いと思います。

《部会員》

子の親の視点で考えると、「働く場所がない」というのはあると思う。

まだ、小学校・中学校くらいまでは友達もいるし、その中で生活していきたいと考えている人がほとんどだと思うが、高校くらいになると現実が見えてきて、登別市で生活したいが、働く場所がないことから、親も子供に対して、大学へ行って、良いところで働いてほしいという考え方になる。

また、ふるさと登別なのに、ふるさと登別というのが感じられないということもある。

定年になってから登別に帰ってくる人もいるが、生産人口を確保しないと、経済の視点からいうと成り立っていかない。

経済が成り立っていくためには、お金をたくさん使ってくれるような世代の受入れが必要となってくる。子育て世代は非常にお金が必要な世代であり、子供が1人増えれば、補助金を交付するまちもある。まち全体で、子供に対してのフォローをしていくのは、今も実施しているのかもしれないが、まだまだ足りないのかもしれない。

また、空き地、空き店舗、空き家というのも、いっぱいあるのだから、安く貸し出して、若い人たちを住まわせて、そこから家族が増えるような仕組みをつくり、子育て環境、教育環境が充実してくれば少しは、定住してくれる可能性があると思う。子供ができて学校に行けば、卒業するまでは外に出たくないと感じるのが親の心情である。働く場所さえ確保できれば、次へつながるような気がするが、まだ登別市は、子育て世代に対する施策の部分はどうなのかな、というふうに感じます。

《部会員》

高齢者はもう十分だから、子育ての方に使わないといけないと思います。

《部会員》

それぞれの役割があると思うので、老人も大切にしないといけない。

それぞれが必要とされて生きている訳なので、みんな大切にしないといけないし、登別市に住んでいた誇りを持たせることが大事だと思う。

現在の登別市の世代の割合は、60歳以上が多く、年齢が下がるにつれだんだん少なくなる逆三角形になっているので、もう少し、生産世代を膨らませるような配置ができれば良いと思いますが、そのためには何としても、働く場所を確保する必要があると思います。

《事務局》

当市では、移住政策も行っています。

現役の人が興味持って、登別はどんなところなのかという話になった時、気候がおだやかで、雪が少なく、空港は割と近くにありますがよという説明をしているが、働く場所の話となると、役所としてはハローワークのように職業を紹介することはできない

ので、ハローワークを紹介することとなります。

《部会員》

登別の産業がわからないので、働く場所のイメージがなく、登別市は、室蘭にある新日鉄や日鋼等の住宅街というイメージがあります。

《事務局》

温泉は温泉で働くところはあるし、工場を持っている企業もあるため、働くところはあるが、常に人を募集しているわけではありません。

大きな工場もあるが、転勤などもあります。

また、室蘭と違って大きな企業がたくさんあるという地域ではなく、中小企業のほうが多いと感じます。

《市庁内部会副部長》

50人規模の工場はいくつかありますが、直接雇用している人数はそれほど多くなく、別の会社に業務を委託しているケースもあります。

正社員がそれほど多くなく、どちらかというと、女性のパートが多い状況で、若い人が正社員として働く場にはなっていないという印象の企業もあります。

その他、医療機関や介護施設などが、働く場としては、結構な規模になっていると考えております。

《部会員》

あとは、スーパーや商店も雇用の場としてあると思います。

《事務局》

全体的にパートが多く、再就職しようと思ってもなかなかできない現状もあるかと思えます。

大企業を誘致すると、雇用は現地採用の可能性もありますが、今ある企業とのバランスも考えなければいけませんので、単純にオススメしていいのかという問題はあります。

また、企業が出店する前には、購買力などの調査もしているという話があるので、進出していただくには、人口が必要と言えます。人口の少ないところには、大型店舗は来ないと思いますが、小さい店舗についても同じことが言えます。

地域に住んでいる購買層の人口と雇用先になるような企業は、表裏一体だと思います。

《部会員》

サービス業ではなく、製造する産業が多く必要だと感じます。サービス業は、人口に比例するので、大手が入って来たら小さい企業は負けてしまいます。

まちとして、製造する産業を皆で知恵を出し合って、お金を出し合って、作ることができたらよいと思います。

例えば、酪農なら、加工して販売するような工場について、これから拡大して成り立たせていけば良いと思いますし、全体的に加工業が少ないという印象もあります。

《事務局》

登別市は、モノは良いが、加工ができないという話になることが多くあります。

《部会員》

全体に登別というまちが、室蘭で働いている人の社宅という形態となっている。

例えば、富士町は、以前から新日鉄の社宅で、それが2～3世代続いている現状があります。幌別方面から室蘭方面は皆室蘭のほうを向いていて、そこに商業が発展したが、商業を行うにも家内労働で人を雇うことがなく、雇用の拡大にはならない。

登別地区だけは温泉があり、観光産業があるので、まちの形態が異なっている。

今回の第3章の部分は、商業、観光、水産業、農業の4つが柱になると思うが、どうしたら、この4つがつながって、連動性をもっていくかということを考えていかなければならない。

歴史を考えると、総論では、商業、観光、水産業、農業の連動性について話しても、各論では、それぞれがその場の話になって、自分たちの分野の話はするが、相手方の話は聞こうとしないということで、今に至っている状況ですが、背に腹は代えられないと思う。

4つの産業形態が1つになるようにくくっていかないといけないと思いますが、市役所のほうが危機感を感じていて、市民の危機感が足りないと思います。

人口が減っていけば、どんどん縮小していかなければならない部分が出てきて、最終的には、有名なまちになってしまうところまで、行きついてしまうので、この10年間は、登別市が生き残れるかどうか重要な段階にあると思う。

水産業1つとれば、第3種漁港になったことを市民がどう感じているかわからないが、なかなかまちに溶け込んでいない感じがします。

盛り上がっているのは、漁港のある区域だけの話で、まちの人は、登別の水産業のすごいところは知らないと思います。

《部会員》

身近なところから、意識を変えて、10年後に共に生き延びていく方法を考える必要がある。

漁業だけでなく酪農も、とても素晴らしい資源であり、登別の財産だと思います。

《部会員》

知らなくて、申し訳ないが、登別市にある農協は、伊達農業協同組合だと思うが、漁協は、登別単独の漁業協同組合があるのか。

《副部長》

登別、白老、虎杖浜の3つの漁協が合併して、今は、いぶり中央漁業協同組合となっており、登別単独での漁協はなくなってしまいました。

しかし、港の名前としては、「登別漁港」というのは、まだ残っておりますが、ブランド力では白老に負けている現状です。

そのため、登別で獲れた魚を、市内の大手スーパーなどでも販売できるよう頑張っている商品もあるが、なかなか浸透していないのが現状です。

登別漁港では、時期によって、タラコの原料になるスケソウダラを獲る時期とタコを獲る時期に分かれています。

加工業では、どうしても白老に負けていると思います。

《部会員》

できることはまだあると感じます。

ブランドの会には、漁業関係で参画しているのは1社だけだが、もっと関わって行って、新しいブランドをつくっていけば、加工じゃなくても、売れるものができると思います。

それを市民総出で売れば、販売力も上がるし、それによって、生産力が必要になり、雇用も必然的に増える流れが作れると思います。

《副部長》

先ほどの企業誘致の話でもあったが、組合が率先して、加工部門などを設けて商品開発して販売するという話も出たが、現在の流通形態の調査も必要です。

大量に上がる魚をうまく活用したいという話は、前々から漁組でも出ていました。

《部会員》

畜産物で言うと、酪農館はどうなのか。

《副部長ほか》

今は、だいぶ有名になってきていると思います。

《部会員》

もっと盛り上げることも必要だと思います。

《副部長》

情報発信に力を入れることが大切だと思います。

《部会員》

市民であっても知らないということは、情報が少ないということです。

《事務局》

登別市民は控えめな人が多く、自分の商品等を積極的にPRする人が少ないと思います。

《部会員》

市民から盛り上がるのが大切です。

《副部長》

登別市には、道の駅がなく、地域のブランド等の特産品などを販売する場所が少ないと思います。

そういう場所があれば、生産したものを販売する流れにつながっていくと感じます。

《事務局》

道の駅は、苫小牧から室蘭までないので、なぜ登別市にないのかという話が出るが、賛否両論でなかなか進んでいません。

道の駅は、建物は行政がつくって、運営は民間にというのが大前提です。

行政主導で建物を建てて、出店を民間にお願いする流れが良いか、地域で出店したいから、行政で建物だけ建てる流れが良いのか。

《部会員》

地域の人たちが声を出したほうが成功につながっています。

《事務局》

そうだと思います。

当市に限らず、行政が色々説得して事業を行うと、「やらされた感」が強くなってしまいます。そうではなくて、「俺たちが行政を動かした」という方が自分たちに責任があるので、自分たちでやろうとするのです。

当市のブランド事業は、行政の方から仕掛けたものだが、富良野のオムカレーなどの成功例は、民間が仕掛けたものが多く、行政が仕掛けてやっていることは、長続きしないことが多いです。

登別の牛乳は、とても品質が良く、当市にもおいしいものはあります。

《部会員》

若い人たちに雇用の場という話では、市も空き店舗対策の中で色々な動きをしているが、起業をさせるタイミングとして、特に登別市には工学院が考えられます。

工学院生は、2年間しか登別にいないが、そこから登別に住み着く仕組みをどうするか。例えば、学校側と連携して、起業おこしをするような仕組みがあってもよいと感じる。

インターンシップのようなのを活用して、魅力を伝えていくのはどうでしょうか。

《事務局》

漁業の担い手はいるのか。

《副部会長》

漁業権の問題で、新たに漁業をできる土壌はできていない。

最初は、乗組員として入ることとなるが、給与は少ない。

若いうちは大丈夫だが、将来的に家庭をもったりすると、生計を維持するのは難しい現状があります。

《部会員》

将来、夢が持てるとよいと思う。

《事務局》

漁業権は誰が決めるのか？

《副部会長》

漁業権は北海道が定めて、認可します。

そのほかに、知事の許可で行う漁業というのがありますが、現状より増えることはありません。廃業者がいたときに、新しく出されることはあるが、たいてい、自分の師弟に引き継ぐ体制となっている。

《事務局》

まぐろの一本釣り等はどのような仕組みか。

《副部会長》

漁業権はもちろんあります。

県や漁業者が連携する体制がうまくできているところが実施していることが多いが、その後、経営がうまくいったかどうかは別の問題である。

《事務局》

酪農はどうか。

《部会員》

新しくやろうとしている人はいません。

農業をやるとすれば、ハウスだとか、畑だとか、小さい面積でこなせるものを希望する人が多く、酪農は少ない状況です。

酪農は、時間無制限で肉体労働を行う腹づもりでないといけない職業であり、甘くないことから、今は、3K（キツイ、汚い、危険）と呼ばれていて、避けられている職業です。

《事務局》

脱サラした人が登別で酪農がしたいという話が来たことはありますか。

《部会員》

ありません。北海道内では、道東を希望する人がほとんどで、この地域では、PRも特に行っていないため、酪農ができることは知られていないと思います。

《部会員》

酪農は肉牛も含まれるのか。

《部会員》

酪農は、乳牛で、肉牛は畜産といいます。

市内には、肉牛だけをやっているところも何件かあります。

「登別牛」として出しているところもあれば、10カ月くらいまで育てて、「もと牛」というかたちで売却しています。

なかなか自分の牧場だけで飼育するのは難しく、次の人が買って、飼育するスタイルにつながっています。

また、酪農と畜産を両方やることは飼い方が違うので難しく、2つやっている人もなかなかいません。

新規就農と、簡単に言うけれど、新規就農者が個人の土地を個別にあたるのは難しく、例えば、場所は、行政が準備するか、紹介したりする仕組みを設けて、抜けた土地を紹介していくことが必要だと思います。

ただし、現状、札内はなかなか抜けていきません。

酪農をやめたとしても、周り近所の農家に土地を貸すことで収入を得て、土地の税金（固定資産税）を支払えるので、あえて所有権の移転はせず、手放さずにいます。

このようなことから、登別では新しい人が酪農できるような体制は整っていない。

《部会員》

市営牧場はどうなっているか。

《部会員》

鉾山の山奥で、放牧だけ行っています。

牛を運んできて何カ月か滞在させている。

《部会員》

一次産業的なものではなく、二次産業は、商品開発などの可能性があり、そこから物販につながれば、雇用の可能性も出てきます。

例えば、農家や水産の直営店。

その段階まで行くには、情報発信が大切だが、その部分が遅れていて、情報発信を通じてブランド化していき、商品価値を高めていくことが必要だと思います。

《事務局》

まずは地元の人が食べないものは、外に広がっていかないと思います。

《部会員》

例えば、今、漁組が取り組んでいるスケソウダラも「たらこ」をとる以外に、皆で、知恵を出し合って活用を考えています。

《副部長》

課題は、それを情報発信して広める方法で、行政で広めるのはなかなか難しいと思うので、民間の力が必要だと思います。

《副部長》

そうなってくると、「観光」というのが非常に効果的だと感じます。

地産地消の中の登別温泉で食べさせるものに前浜の魚をどう活用するかということが三種漁港にする時からの大きなテーマです。

今は、クロアワビで、今後、単価は高くなるかもしれないが売ろうという話はある。

年間130万人のお客様に対応できるだけの生産量の確保が課題です。

季節ごとに上がってきたものをうまく活用しながらやってはどうかと思います。

《事務局》

エゾアワビの種苗購入は行政で支援しています。

《部会員》

登別農協は、伊達農協と合併し、登別温泉も伊達農協の区域に入った。

その段階で、伊達の米を買ってほしくて、ホテルに交渉したことがありました。

ホテル側としては、365日必要だと言われましたが、伊達市内で作られている米の量より、ホテルが必要とする米の方が多い可能性がある。

ホテル側も供給が安定しないと困るので、地産地消と簡単に言うけれど、今入っている業者を避けてまで参入するのは難しい状況です。

《副部長》

海産物も同じで、安定供給が難しい状況です。

《部会員》

そこが痛いところで、札幌から入れたら確実に入ってくる。

バイキングなどを好むお客さんもいれば、うまいものを食べたいというお客さんもい

るわけで、そのメリハリをつけてできれば可能性があると思います。

本来は、登別市民が消費していくことが一番の PR につながると思います。

《事務局》

よく産地が登別のものを使って、特産品をつくろうという話になるが、飽きやすい人が多いのか、事業が続かないイメージがあります。

《部会員》

試食会などをやっていることがありますが、もう少し長く続けられないかと思えます。

《部会員》

売れないからやめるんだと思えます。

《市庁内部会副部長》

昨年、民間事業者がエゾシカの処理場を札内につくりました。

エゾシカは、有害鳥獣であるため年間150頭くらい駆除しており、今までは、駆除したあとは、解体して手間とお金をかけてクリンクルセンターで処分していました。

これを有効に活用しようと考え、ジンギスカンや缶詰などの商品化に取り組んでいます。

《部会員》

シカはたくさんいるが、札内は居住エリアであるため、撃つところが少ない。

そのため、沢の上から下に向けて撃つことになり、その後、沢の下で解体して上に上げないといけないので、大変な状況があるようです。

《事務局》

ブランドになりそうなものはいっぱいあります。

《部会員》

作っても買ってくれるかどうかの問題で、また、ある程度の量を供給できることも必要です。

《部会員》

道の駅とよく言うが、何を売るかと考えれば、今だと魚や牛乳しかないと思う。

道の駅は、新鮮な野菜があるから成り立つと思う。

野菜は、1日食べる分くらいしか買っていかない。

登別牛乳は、1人で10は飲めないなので、余った牛乳をどうしたらいいかと悩んでいる人もいます。

《部会員》

活用方法について情報を出す等の工夫が必要だと思います。

《部会員》

余ったというより、登別牛乳の活用を PR することは良いことだと思います。

《部会員》

牛乳だけに限らず、他のものについても言えることです。

《部会員》

そこまで考えれば、買ってくれる人が増えるかもしれない。

《部会員》

試食会があったら呼んでほしい。

ネクタイしめているだけの人が効果は薄く、家庭の主婦とかが行って広めるのが良いと思います。

《部会員》

コミュニティビジネスという考え方は新しい。

今までお金にできなかったことをお金にかえていくような仕組みは大事だと思います。

例えば、道の駅の話で言えば、売るものができます。

《部会員》

黒松内など道の駅で成功しているところだと、パンやピザで成功しているところもあります。

《事務局》

道の駅の中でもトイレだけ使うようなところもいっぱいあります。

登別市の道の駅を作るにしても、誰が何するのかというところは大事です。

最近では、港と一緒に「水の駅」のようなものがないかという話も出ていました。

《部会員》

海鮮直市は、品物もすぐなくなるし、好評だと聞いているが、毎日できないか。

《部会員》

売る人はボランティアで、行っているし、先ほど話した仲買人の邪魔をしてしまうことも考えられます。

《事務局》

登別市の漁港は、衛生的でいい魚が出せるように、屋根付き岸壁になっている。
登別の魚が買える場所はあるか？

《副部会長》

基本的にはありません。
他の地域からあがった魚と同じような流通経路になってしまいます。
直売所のようなところがあれば、買うこともできるのですが、今のところありません。

《部会長》

第1回ということで皆の心の声を少しずつ聞きました。
また、思いついたものは次回の会議でも発言いただきたいと思います。
次回の会議は、6月4日（水）18時30分から第2会議室で開催します。